

凡例

- 一、本書に登場する容積の単位は以下の通り。一マース (Maa) Ⅱ一・〇六九リットル。
一アイマー (Eimer) Ⅱ六四リットル。
一、一八七三年七月にドイツ帝国領内で金マルクの使用が義務付けられる以前のバイエルン王国およびフランクフルト・アム・マインにおける通貨単位は以下の通り。一グルデン (fl) Ⅱ六〇クロイツァー (kr)、一クロイツァー Ⅱ四プフェニヒ (pf)。

序章

はじめに——ビールをめぐる二つの事件

本書は一九世紀ドイツ地域におけるビールを題材に人と人、人と物の結びあうかたちを考察する。わけでも紙幅が割かれるのは、一八四四年から一八九四年の五〇年間である。奇しくもちょうど半世紀をはさんで生じた出来事が、近代ドイツ社会の政治文化に無視できない影響を及ぼしたと考えられるからだ。二つの出来事とは、一八四四年五月にバイエルン王国ミュンヘンで起きた「ビール騒擾 (Bierkrawall)」と、一八九四年五月に始まった「ベルリン・ビール戦争 (Berliner Bierkrieg)」である。

前者のビール騒擾については、若き日のF・エンゲルスがイングランドの『ノーザン・ス

ター』紙に記事を寄せている。

バイエルンのビールはドイツで醸造されているものの中でも、もっとも祝福されたビールである。いうまでもなくバイエルン人はこのビールの中毒であり、かなりの量を消費する。このたびバイエルン政府はビール価格を二倍に設定した。その結果、事件が勃発した。四日以上にもわたって労働者たちが大挙して街路を練り歩き、(…)手の届くものをことごとく破壊した。お気に入りの飲み物の価格高騰に、復讐を図ったのである。¹⁾

この事件に來るべき革命の前触れを見出すエンゲルスは、昂ぶりを抑えられなかったのか、事実関係をやや誇張している。一八四〇年代に入ってからビール価格が高止まりしていたのは事実だが、二倍というのは大げさで、前年の同じ時期に比べると一マース(一・〇六九ℓ)当り約八%の値上げに留まる。また実際には、騒擾は五月一日から三日までの三日間で終息している。治安当局の報告によれば、この間、暴徒の数は二千人を越えたとされるが、「手の届くものをことごとく破壊した」わけではない。襲撃対象は市内三〇軒あまりの醸造所と一部の官公庁に限られていた。とはいえ誇張を取り除いてみたところで、死者を出すまでに至ったこの事件の異様さはぬぐえない。ビール高騰に対する異議申し立てとしては、酔っぱらいの騒ぎの域を超えている。当局も、ビールをめぐってこのような暴動が発生するとは「前代未聞」だと驚きを隠せずにいた。²⁾政府がビール価格を「設定」していたというのは、ビールが価格公定制度の対象だったことを

意味する。つまり、同じく公定価格で販売されたパンとならんで、ビールは「基礎的栄養源(Grundnahrungsmittel)」と見なされていたのである。³⁾ドイツ人にとってビールは水代わりだから。「ヨール純粋令(Reinheitgebot)」⁴⁾を誇るドイツのビールは品質に優れているから。それに、何よりミュンヘンは、周知のごとく「世界最大のビールの祭典」オクトーバーフェストの開催地なのだから、ビールが「食糧」と見なされていても不思議はないと思われるかもしれない。そして「食糧」騰貴が続けば、時に暴動が起きるのは洋の東西を問わないだろう。

しかし、ならばなぜ、ビールがとりわけ問題視されねばならなかったのか。同じ時期にパンをはじめ穀物、肉、バターなどおおよそあらゆる「食糧」が高騰していたのにもかかわらず、ビールだけというのは奇妙なことと思われる。⁵⁾これが本書の出発点となる疑問である。

次に、「ベルリン・ビール戦争」とは、一八九四年五月から一二月の八か月にわたり三二軒の醸造所の製品を対象に展開された不買運動を指す。ベルリンに暮らす数十万の労働者を動員したと言われるこの出来事は、ビール醸造所と労働者の対立に加え、中間業者の酒場、運動に介入した社会民主党(SPD)と労働組合、調停に奔走した自治体当局、事態を重く見て「ボイコット」の非合法化を模索し始めた政府など、各方面を巻き込んで国内の世論を沸騰させ社会に強烈なインパクトを与えた。さらにこの出来事をきっかけに各地で「ビールボイコット」が頻発するようになっただけでなく、他の商品やサービスに関しても類似の異議申し立てが起きるようになった。それゆえ、

ドイツではビール醸造所に対するボイコットが、ボイコット運動の典型と化した。⁽⁶⁾

とまで言われるようになる。

本書では、便宜的に「ビール騒擾」と「ビールボイコット」をまとめて、「ビールをめぐる異議申し立て」と呼ぶことにする。両者は、これまでビールという一点をのぞけば、相互の断絶が強調されてきた。前者が物理的暴力をとまなう前近代的なタイプの民衆運動なのに対し後者は近代的な労働運動の一環であるとして、一九世紀後半の高度工業化にともなう民衆の意識や行動様式の変化を示す好例と位置づけられてきたのである。⁽⁷⁾確かに時代、地域、担い手がまったく異なる両者の間に直接の連関を見出すことはできない。だが、両者を隔てる五〇年の期間には、実はこれまで見過ごされてきた無数のビールをめぐる異議申し立てがひしめいている。そして、ここでもまた同じ疑問が浮上する。なぜビールが俎上にのぼるのか。むしろ今ほど選択肢は多くなく地域差も大きかったとはいえ、アルコール飲料は他にもあり、しかもジャガイモ蒸留酒やワインは庶民の口にも入るようになっていた。にもかかわらず異議申し立ては、必ずと云っていいほど、ビールをめぐる発生したのである。

本論で詳述するように、ビールをめぐる異議申し立てを何か一つの要因に還元することはできない。だが、人びとをビールへと駆り立てた重要な力線の一つはラガービールにあったのではないか、というのが本書の見立てである。「ラガー (Lager)」とはドイツ語で倉庫や貯蔵庫を意味する。手近なところで『ビールの教科書』を開いてみると、ラガービールは次のように説明されて

いる。ビールはエールとラガーの二種類に大別でき、両者は酵母や製造法からして異なる。エールが常温で数日のうちに造れるのに対して、ラガーは低温の貯蔵庫で一か月近く、時にはそれ以上寝かせる必要がある、手間がかかるのだ。なにより「ラガーはエールよりもずっと歴史が浅い」。⁽⁸⁾中世以来ビールといえはハンブルクやリューベックといった北ドイツの都市が有名で、現在の分類ではすべてエールだったようである。これに対して一六世紀頃まで南ドイツの製品は品質が悪かったため、一七世紀初頭に当時のバイエルン公は美味なビールで評判だったハンザ都市アインベック（現在のニーダーザクセン州）から醸造親方を招聘し、ミュンヘンの宮廷醸造所でアインベック流のビールを造らせるようになった。⁽⁹⁾これが、後のラガービールの原型となる「ボックビール (Bockbier)」の誕生だった。

とはいえ、先ほど触れたビール純粹令に酵母への言及がないことからわかるように、まだ発酵の原理は知られていなかったから、ここで培養されたラガービールの酵母が意図的に持ち込まれたわけではない。むしろラガービールの誕生は偶然的な産物であり、貯蔵庫で二次発酵させたものが期せずして評判を呼んだのである。こうしてミュンヘンは、「世界に先駆けてラガーを造った」街となり、その後「ミュンヘン一帯は、ホーフブローハウス〔宮廷醸造所…筆者〕を中心に切磋琢磨し（…）遅くとも一九世紀になると、バイエルンはドイツの中でもビールの美味しい地域と言われるようになる」。⁽¹⁰⁾

宮廷醸造所に紛れ込んだラガー酵母、貯蔵庫での熟成（二次発酵）、一六世紀以来の小氷期（寒冷な気候が続いた時代）によるバイエルン地方でのワイン生産の衰退、そして一八世紀末の君主

交代をきっかけに本格化した市場競争経済の浸透など、諸々の偶然に必然が重なりつつも、一九世紀に入った段階でミュンヘン住民には口に出来て当たり前となっていたラガービール（濃い琥珀色や暗褐色だったことから、ミュンヘンでは「茶色」を意味する「ブラウンビール」と呼ばれた）は、ドイツ地域の近代化と平仄を合わせるかのように、中央ヨーロッパ、北アメリカ、そして極東アジアにまで爆発的な広がりを見せることになる。第五章で詳しく説明するように、その新奇性は、従来のビールを「みじんも泡の立たない屎尿のごとき」とまで呼ばせるものだった。

すでに紹介した本書の核となる二つの事件に限らず、これから取り上げる異議申し立てはおしなべてラガービールと関わっていたようにみえる。「前代未聞」とされたミュンヘンのビール騒擾は、宮廷醸造所の特権廃止にともない民間醸造所によるラガービール供給が自由化されて間もなくの出来事だったし、それから五〇年後にベルリン・ビール戦争の標的となった三二軒の醸造所は、いずれも「リング」と呼ばれたラガービール醸造業者組合の加盟企業だった。ベルリンでは伝統的に「ベルリナー・ヴァイセ」というエールが親しまれていたが、ベルリナー・ヴァイセを造る醸造所は別に組合を結成しており、ボイコットの対象からは外れている。これ以外にも本書ではアウクスブルクやニュルンベルクといったバイエルン領内の都市に加え、カールスルーエ、ドレスデン、フランクフルト・アム・マインなど各地の事例に考察を加えていくが、どの地域でもベルリン同様伝統的なエールを供給する醸造所が多数存在した。ところがビール騒擾やボイコットは、ほぼ例外なく、ラガービールが嚙下されるようになった後に、ラガービールを対象として発生するのである。ラガービールの流行とビールをめぐる異議申し立ての数々の間には、

何らかの相関があったとみてまず間違いないだろう。

急速な近代化を経験しつつあったドイツ社会の日常に浸透したラガービールは、人びとの生活に欠かせない役割を担ったのではないか。おそらくそれは、全面的にはないにせよ、従来の「ビール」とは異質なものとして、彼らの期待と不満、欲望と失望を醸成し、社会的結合を促すようになったのではないだろうか。一九世紀後半に入るとパンやジャガイモをめぐる食糧騒擾が徐々に目立たなくなる一方で、ビールをめぐる運動はその数を増していく。このことは、ラガービールを通じて生活に関する心性や価値観が変化し、それにともなう異議申し立てが新たな表現形式を獲得していったことを示唆している。どんなに些細なことであろうと、人が自らの要求を表明し、他者との協働や相剋が生じれば、それはすでに広い意味での「政治」である。そこに社会の統治構造が関わってくるとなれば、なおさらそうした性格は強まるだろう。ビールは、一九世紀ドイツ地域において日常に根差した「政治」のあり方を規定したのではないか。つまり、ビールをめぐる一連の民衆運動の背景を明らかにすることは、一九世紀ドイツ地域における政治文化の新たな一面を照らし出すことにつながると考えられるのである。

本書の位置づけと課題

本書の目的は、一九世紀ドイツ地域のビールをめぐる異議申し立ての史的背景を、ラガービー